



阪神大震災から10年。
今月は、芹田代表理事の巻頭文です。

お品書き
【その巻】CODEレター VOL.20
【その忒】スリランカ現地視察レポート・ぶどう新聞

以上

Letter

2005.2.23 VOL.20

CODE海外災害援助市民センター発行
〒652-0801 神戸市兵庫区中道通2-1-10
TEL : 078-578-7744 FAX : 078-576-3693
e-mail info@code-jp.org URL <http://www.code-jp.org/>
郵便振替 : 00930-0-330579

忘れないとは仲間を増やすこと

芹田 健太郎

CODE 海外災害援助市民センター 代表理事

阪神淡路大震災から10年が経過した。

震災10年のイベントはまだ続いているが、人びとは「ポスト10年」に向けて歩み始めた。

兵庫県は10年間掲げ続けた「復興本部」の看板を本年度末で降ろす。5年のとき県は国際検証を行った。そして今回、復興10年委員会を設けて、復興10年総括検証と提言を行った。復興過程を総括的に検証した結果を、全世界の共有財産として国内外に発信するため、「創造的復興フォーラム」が「伝えよう 1.17の教訓—創造的復興から未来へ—」と題して開かれ、6分野54テーマにわたる検証結果は1.17の直前に3日間にわたって報告された。1.17の追悼式には天皇・皇后両陛下がはじめて参列された。

10年は区切りとはいえ、すべてが幕引きのために行われているかに見える。国連防災世界会議での「忘れない」という天皇のお言葉は、We shall never forget と訳された。同じ兵庫県知事の発言は、Remember January 17 と同時通訳された。何を忘れないのであろうか、何を心に留めるのであろうか。それぞれに大切な人が失われたことは、忘れろと言われても、忘れようもない。忘れないとは、そうした個人的な思いを、人類の記憶に埋め込むことである。人類の記憶に埋め込むには絶えざる記憶の分有を必要とする。記憶の分有には、あたかも細胞分裂のように、仲間を増やすことである。

埋め込まれた記憶は仲間と共にする行動の原動力となる。埋め込まれた記憶が人びとを突き動かして行動する。なされた多くの提言はポスト10年の課題であるが、指摘された課題は被災地だけのものではない。しかし、課題の実現には、人びとを「突き動かす」ものがなければならない。それが、埋め込まれた記憶である。

われわれの記憶の中には、スマトラ沖地震による大津波も埋め込まれた。広島や長崎の原爆投下、東京・大阪やドレスデンの大空襲、南京大虐殺やアウシュビッツのジェノサイドなどとともに人類の記憶となった。平和や人権や安全は、こうして、人類の永遠の願いなのである。

ポスト10年、われわれは仲間を増やしていかなければならない。われわれは、率先して、最後のひとりまで大事にし、そのひとりに寄り添う人となろう。そのことを通して、一人ひとりが大事であり、そのひとりに寄り添うことをする人の輪が大きくなる。そして、このことを大きな声で語らなければならない。われわれの課題である。

国連防災世界会議が神戸で開催

2005年1月18日～22日まで神戸ポートアイランドにて国連防災世界会議が開催され、世界168ヶ国から多くの人々が参加し、災害の被害軽減策について討議が行われました。CODEは、その中で2つの関連事業に参加しました。

1月20日-CODEシンポジウム「震災10年と市民社会」

1月20日、国連防災世界会議の関連行事で、阪神大震災後の市民活動を考えるシンポジウム「震災10年と市民社会」をCODEが主催しました。

プログラムの第1部では、基調講演としてCODE代表理事である芹田健太郎が、「神戸宣言にこめた思い」と題し講演を行いました。芹田代表理事は、12月の市民とNGOの「防災」国際フォーラムで採択した「神戸宣言」を、被災者のくらしの再建にこだわった人権宣言であると紹介しました。

第2部では、「くらしをつなぐ市民のきづな～語り出す・学ぶ・つながる・つくる・決める・育てる～」と題してパネルディスカッションが行われました。司会は、ひと・まち・くらし研究所常務理事の山口一史さんで、パネリストとして、村井雅清事務局長、室崎益輝副代表理事、県立舞子高校環境防災科の諏訪清二教諭、メキシコのNGOの事務局長、クアテモック・アバルカさんが、それぞれの経験から防災の課題を議論しました。クアテモックさんは、国境や宗教、言葉、人種を越えて人々が分かり合い連帯することが大切であると強調しました。



1月21日-「災害ボランティア世界会議」

21日には、災害ボランティアの将来像について議論する「災害ボランティア世界会議」が開催されました。

会議の冒頭では、国連ボランティア計画（UNV）のアド・デラード事務局長が、災害ボランティアの役割は発生時の救援段階から、災害予防・政策提言の段階に移りつつあると述べました。

海外からの事例発表では、イラン、韓国、トルコ、インド、メキシコの災害ボランティアらが各国の課題を報告しました。

会議では、減災の知恵を集めたボランティアのシンクタク「知恵のひろば」も発足しました。知恵のひろば準備室長の栗田暢之は、知恵の「智」という字は「知る」と「言う」という2つの意味を含み、知識を集めるだけでなく、発信することが大切であると述べました。

22日に会議の閉幕を受け、世界8ヶ国のNGOメンバーや学者が会見し、会議の成果文書である「兵庫行動枠組み」の不備を指摘しました。「人を中心にした防災活動を」とうたい、世界各国の130のNGOが共同署名した声明を発表しました。

松蔭高校生が翻訳ボランティアに挑戦

神戸市にある松蔭高校の生徒7人が2月7日、CODEで、海外の災害情報を日本語に訳す翻訳ボランティアに挑戦しました。

翻訳ボランティアとは、「World Voice」というCODEの国内事業のボランティアです。「World Voice」では、国連人道問題調整事務所（UNOCHA）が出す災害情報ネットであるリリースウェブから、世界の被災状況の記事を選び日本語に訳した後、CODEのホームページで紹介しています。これをおして、世界の被災地での人々の暮らしや生の声を日本語で発信することができます。

この日参加した7人の高校生と付き添いの先生は、まず村井事務局長からスリランカの現状について、写真を交えて30分くらいの説明を受けました。



その後、高校生はスリランカの被災状況の翻訳に挑戦しました。記事には、災害の専門用語や国連機関の専門用語があり、高校生には少し難しかったようです。しかし、松蔭高校の英語の先生やCODEのスタッフの助けを得ながら、なんとか



記事を翻訳し、早速CODEのホームページに掲載しました。翻訳に特に興味を持った4人の高校生は、これからも定期的にCODEの翻訳ボランティアに協力して下さるそうです。

ありがとうございます11/10～1/10

<p>会員・寄付者ご芳名（以下順不同・敬称略）</p> <p>一般寄付 個人：慶児純子、昇領夫、岩国正次、笠置りか、斉藤茂樹、杉田文夫、山本千佐子（以上兵庫）古本抹美子、清宗正明（以上大阪）羽山聡美、室崎益輝、島洋三郎、成毛典子、三井さよ（以上東京）李章根（奈良）小舟愛子（京都）貫名美鈴（広島）団体：愛の光500（神奈川県）</p> <p>会 員 正会員 個人： 水野雄二（兵庫）室崎益輝（東京） 賛助会員 個人：宮前亮一郎、市丸仁一、光葉啓一、上田耕蔵、垣内史、飯塚節、後藤堅吾、榎原大介、榎原股子（以上兵庫）三井さよ、羽山聡美、栗原謙治（以上東京）阪本絹代（滋賀）</p>
--

編集・発行 CODE海外災害援助市民センター
〒652-0801 兵庫県神戸市兵庫区中道通2丁目1番10号
TEL：078-578-7744 FAX：078-576-3693
e-mail info@code-jp.org URL <http://www.code-jp.org/>
郵便振替：00930-0-330579